

Title	吐魯番出土文物研究会会報 第37号 : 特集・新著紹介Ⅱ
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 37 p.1-p.6
Issue Date	1990-05-15
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/78847">https://doi.org/10.18910/78847</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 吐魯番出土文物研究会報

1990年5月15日  
吐魯番出土文物研究会

## 第37号

特集・新著紹介Ⅱ

### 【はじめに】

本号では前号に引き続き、1988年に中文で公表された論著を紹介するが、主として高昌国時代に関するものを集めてみた。なお唐西州時代に関するものは、次号以降に紹介する予定である。

☆

☆

☆

☆

### ◆錢伯泉「高昌国郡県城鎮建置及其地望考実」

(『新疆大学学报』1988年第2期、34~41)

本論文は、高昌国において郡・県が置かれた各城邑の沿革と、それら城邑の地理比定を試みたものである。これまでも高昌国時代の城邑の問題は、論じられることが多かったが、氏は、高昌国の城邑を都城・郡・県・鎮戍にわけて論じ、高昌国前期(497-560年〈錢氏〉)と後期(561-640年)とで、それぞれ異動があったと指摘される。即ち、前期では、都城(高昌)・三郡(交河・田地・横截)・十一県(柳婆・無半・鹽城・始昌・白力・安樂・永安・南平・湟林・高寧・新興)・三鎮戍(臨川・由寧=寧戎・威神)であったものが、後期になると、都城(高昌)・三郡(交河・田地・南平)・十四県(横截・永昌・無半・始昌・安樂・安昌・永安・湟林・高寧・寧戎・威神・臨川・酒泉・龍泉)・四鎮戍(東鎮城・篤進・鹽城・柳婆)へと変遷したと推測される。

さらに後期の行政区画を論じて、交河郡が永安・安樂・湟林・龍泉の四県と鹽城・柳婆の二鎮を、南平郡が安昌・無半・始昌の三県と篤進の鎮を、そして田地郡が高寧・横截・威神・臨川・永昌・寧戎・酒泉等の県と東鎮城をその管轄下に置いていたとされる。またこれらとは別に、武城はかつて県が設置されていたものの、後(唐西州時代?)に郷になり、高昌城に属したと認められる(ただし、氏が武城に県が設置されていたと主張される根拠は、「高昌延壽三(六二六)年范宗遜墓表」(60TAM 339:35)に「武城令兵将」とあることであるが、当該箇所は「武城の領兵将」と解すべきであろう)。これらの結論から、氏は高昌国の郡と県・鎮戍との間に、それぞれ統属関係が存在したことを主張されている。

また氏は、各城邑の地理比定を試みられ、ほぼ次のように結論される。

④武城城(阿斯塔那の西南。高昌国末期に、県が廃されて城が設置され、城主が置かれたとする)  
⑤田地郡(鄯善県・魯克沁)⑥高寧県(吐峪溝)⑦酒泉県(洋赫)⑧永昌県(新興県を改名。高昌古城の北約10kmの火焰山下)⑨寧戎県(木頭溝外、今の七泉湖付近)⑩横截(蘇巴什)⑪臨川県(連木沁)⑫威神県(連木沁の東北20km前後、漢墩)⑬東鎮城(鄯善県城)⑭交河郡(雅爾城)⑮安樂県(吐魯番県城)⑯鹽城県(雅木什)⑰湟林(葡萄溝)⑱永安県(安樂県以東)⑲龍泉県(大河沿鎮火車站の付近)⑳柳婆(吐魯番県城の西南、柳城)㉑南平郡(讓布工商古城)㉒安昌県(安集延不周窪・帕格布拉克)㉓始昌(托克遜県城の東60余里の阿薩爾撒里)㉔無半県(艾丁湖北の烏盤土拉)㉕篤進(托克遜県城)と検討されている。

この氏の比定のなかで最も注目されるのは、上記⑩にあげた永昌県が、新興県を改称して設置されたと推測されたことである。遺憾ながら論拠は挙げられていないが、確かに新興県なる名は、麹氏高昌国時代のトゥルフアン文書に登場する城邑のなかには見いだすことはできず、『梁書』巻五四諸夷伝、高昌の条、および「建昌元(五五五)年折衝將軍新興令麹斌芝造寺施入記」のみにその名を留めるだけである。もちろん、そのことが即座に新興県が廃されたという決定的な根拠とはならないこと

は言うまでもないが、今後両県の関係についての詳細な追究が期待される。

しかし何といっても、本論文の最大の特徴は、麴氏高昌国の城邑を、これまでとは異なり、都城・郡・県・鎮戍にわけて論じていることであろう。それぞれの関係についても、郡と県・鎮戍との間に統属関係を認められるごとくである。ただし現在こうした理解とはまったく異なる見解もあり (cf. 荒川正晴「麴氏高昌国における郡県制の性格をめぐって」〈『史学雑誌』第95編第3号、1986年〉)、麴氏高昌国の城邑支配の体制については、今後議論を深めてゆく必要がある。その際、いまだ十分には検討されていない高昌国の「城令」問題が、あらためて問われることとなろう。(T)

#### ◆郭平梁「魏晉南北朝時期車師—高昌一帯的民族及其相互關係」

(『新疆文物』1988年第3期、99～104 〈「魏晉南北朝時期高昌地区的民族及其相互關係」と改題して、中国民族史学会編『中国民族關係史研究』西寧 青海人民出版社、1988年、所収) )

高昌郡時代より唐西州時代までの時期に吐魯番盆地にあった民族を、編纂史料と出土文物から明らかにし、各民族ごとにその動向を概述したもの。各民族ごとに著者の紹介を要約すると、以下のようになる。

①車師人 吐魯番盆地の先住民族で、古くからこの地にあったが、五世紀半ばに沮渠氏と柔然に滅ぼされた。ただその一部は車姓を名乗りながら、唐代までこの地にあったことや、高昌国時代には車寺という寺院まであったことが、文書から判明する。

②匈奴人 当該時期に吐魯番盆地に定住していた匈奴人は、一旦中原に南遷し、あらためて西遷して来た沮渠氏とそれに率いられた部族である。沮渠氏は北涼が北魏に滅ぼされると、鄯善を経由してこの地に進入し、車師前王国を倒して盆地を統一した。「承平十三(四五五)年四月沮渠封戴墓表」以下の文物は、匈奴人がこの地の歴史上に重要な地位を占めていることを物語っている。

③鮮卑人 匈奴の分裂直後から鮮卑人はこの一帯に勢力を及ぼしていたが、吐魯番盆地に定着するようになるのは比較的遅く、高昌国時代以後に秃髮姓が文書に見えている。また鮮卑の別種である柔然は五世紀中頃以後、盆地に介入を始めた。その元号である「永康」紀年の文書は、このような柔然の活動を示している。

④月氏人・嚙唃人・吐火羅人 月氏人と嚙唃人は西方にあって、しばしば吐魯番盆地一帯に侵寇して来たほか、交易や布教活動を通じても盆地と関係をもった。例えば、多くの支姓の僧侶が東方にやって来たが、彼らはいずれも月氏人であり、盆地で出土したサンスクリットをはじめとする非漢文仏典の伝播にも、彼らが与かっていた。また吐火羅人については、盆地一帯で吐火羅語の写本が数多く発見されており、これは真正の吐火羅語ではないにせよ、この地に吐火羅語系の言語を用いる相当数の人々が存在していたことは否定できない。

⑤昭武九姓胡人 吐魯番盆地はこの昭武九姓胡人、すなわちソグド人の東方における交易活動の拠点となっていたので、文書からその存在形態をつぶさに知ることができる。先ず彼らは康寺、史寺、安寺、曹寺といった国名を冠した寺院(ゾロアスター教の寺院である可能性が高い)を建立した。また盆地に定着して編戸となった人々も少なくなく、農業や園芸に、さらには商工業に従事していた。彼らは漢族をはじめとする異民族とも通婚した。彼らの言語であるソグド語、文字のソグド文字の資料も今世紀初頭に出土している。

⑥鄯善人・焉耆人・龜茲人 一部の鄯善人が鄯善から吐魯番盆地に北遷して来たので、唐代には納職県が設置されたが、高昌国時代から唐代にかけての文書に鄯姓の鄯善人が散見される。また洛陽出土の墓誌から、車師の王族とも通婚していたことがわかる。焉耆は盆地と地理的に近接しており、古くから両者の間には密接な関係があったが、文書にも焉耆の龍姓の出身者が数多く見えている。また彼らのうちには、他民族と通婚していた例もある。龜茲人も盆地に流寓しており、文書からもその王族の姓にちなんで白(帛)姓を名乗った龜茲人の存在を指摘できる。また彼らはこの地で白寺なる寺

院を建立していた。

⑦高車人・突厥人 高車人の吐魯番盆地への侵入は、五世紀末期、副伏羅部によって開始された。一方、突厥人の侵入は六世紀後半に入ってからだが、高昌国王や王太子である高昌令尹は、突厥から授けられた官号を称しており、その勢力と影響には強いものがあつたことがわかる。また突厥人と思われる名前や官号が文書に少なからずあり、多くの突厥人が流寓していたと考えられる。「珂寒寺」も彼らが建立した寺院であろう。高昌国時代には、この地の漢族に対して文化的にも影響を及ぼしていた。

本論ではこのほかに⑧として漢人についての説明もあり、吐魯番盆地に関わりをもったあらゆる民族について、その由来と盆地との具体的な関わりについて述べられている。匈奴人や高車人など、とくに目新しい主張があるわけではない項目や、柔然人のようにさらに掘り下げるべき項目も少なくないが、人口の圧倒的多数を占めていた漢族ばかりが目されることの多かった高昌国も、実は多種多様な民族を擁していたのであるという主張として本稿を理解すれば、その意義もあながち軽視できないのではないだろうか。また文書に登場する各民族の出身者の姓名を逐一上げている点は、不十分ながら人名索引としての役割も期待できるように思う。(N)

◆杜斗城・鄭炳林「高昌王国的民族和人口結構」

(『西北民族研究』1988年第1期、80～86, 282)

前稿が高昌郡時代から唐西州時代までの、主として非漢族を対象としていたのに対し、本稿は高昌国時代に限定して、漢文文書に見える姓氏について記載の頻度を調べ、それぞれに検討を加えたもの。したがって当然のことながら、漢族が中心になるが、やはり各姓氏ごとに著者の説明を要約しておこう。

張氏 記載頻度が二八四回と最も高い。高昌の張氏は敦煌の張氏と同じく、河南南陽郡白水県に属する。漢代に涼州に徙居し、魏晋時代にはこの地の大族となったが、沮渠無諱が敦煌から高昌へ西遷した際、その一部が高昌へ移ってきて、のちに張氏高昌国を樹立させた。

趙氏 一二〇回で張氏に次ぐのが趙氏である。いうまでもなく金城郡榆中県出身で、趙氏高昌国の王族である。

索氏 四五回と前二氏に大分劣るが、敦煌の索氏で、高昌へ徙居したのは、後漢の明帝年間頃まで遡ることができる。

陰氏(三三回)・宋氏(二七回)・袁氏(七回)・鞏氏(七回)・趙氏(一〇二回)・周氏(四回)・氾氏(四〇回)・曹氏(六二回)・辛氏(二四回)・李氏(二五回)・隗氏(六回)・關氏(八回) 陰氏と宋氏は敦煌の望族、袁氏は武威・張掖一帯から、また鞏氏は張掖から徙居したものである。趙氏も敦煌、周氏は酒泉一帯、このほか氾、曹、辛、李の各氏も敦煌の同姓と密接な関係を推定できる。とくに李氏は西涼の滅亡後、伊吾を経由してこの地にやって来たものであろう。隗氏は天水の隗氏で、北涼時代の高昌太守隗仁の裔。高昌国の漢族の大部分は以上のような河西方面から徙居した姓氏によって占められていたが、とくにそのうちでも、張氏、陰氏、索氏、關氏、李氏、および辛氏といった敦煌の望族が、高昌にあっても望族として王国の最高権力を掌握していた。

唐氏(九回)・馬氏(二二回)・王氏(六九回)・李氏(二五回)・鄭氏(八回)・張氏(二八五回) 漢族のうちには、河西方面からの徙居者に比べれば数こそ少ないが、遠く中原方面から直接この地に徙居した姓氏もあった。このうち唐氏は山西の平陽から、馬氏は陝西の扶風から、また王氏は太原から徙居したものである。なかでも王氏は、人数の点でも、権力機構上に占めた地位の点でも、敦煌の陰氏や索氏に匹敵する勢力を誇っていた。

漢族以外では、鄯善の鄯氏(一〇回)、焉耆の龍氏(八回)、龜茲の白氏(三一回)、および疏勒の裴氏(一回)など近隣のオアシス国家の出身者のほかに、以下のような多くの昭武九姓と称された

ソグド人の存在が知られる。

康氏（一〇五回） 高昌国全体でも張氏と趙氏に次いで第三位の多さである。にもかかわらず、権力機構の上層にあった者は少なく、その多くは名籍類や交易・契約関係の文書に登場しているので、ソグド人だったことがわかる。

史氏（三六回）・石氏（三回）・安氏（一六回）・何氏（二二回） 頻度からすれば、このうち史氏と何氏は、漢族の陰氏や索氏に匹敵している。ただ曹氏については、漢族にもこの姓があり、高昌国の曹氏には、敦煌の曹氏が含まれており、政権にも参加していたので、全てがソグド人とは言えない。この点は史氏や何氏も同様である。

高昌国の人口構成は民族の点から見れば、70～75%を占める漢族と、25～30%を占める各種の少数民族から成っているが、これを生業から見ると、一般の民戸（農民、都市住民など）、非定着民（商人、遊牧民など）、および寺院関係者に分類できる。このうち一般民戸が四・二万、寺院関係者が一万とすると、高昌国の人口は総計で五、六万以上に上ったはずで（兵員は、二万以上）、実際には新旧両『唐書』高昌伝の記載を上回ると考えられる。

各姓氏の記載の頻度にしても、人口規模にしても、数字が多用されているわりには、その根拠があまり明確でないのは致命的と言えなくもないが、前者に関しては基本的な傾向を把握する限りにおいては、先ず異論はないであろう。ただ著者も指摘していることだが、曹氏のように、漢族と非漢族双方にある姓氏も少なくなく、また漢族でも本質を全く異にする王氏のような存在もあるので、一層の検討を要する。

おそらく今後の高昌国史研究の大きな課題のひとつは、吐魯番盆地の漢族社会が、どのようにして形成されたのかという点にあるかと思われるが、これは換言すれば、中国内地の地域社会における諸関係をいかに維持しつつ（あるいは否定しつつ）徙居が行なわれたのか、ということでもある。本稿はこのような課題に向けてきわめて初歩的ではあるが、確実な貢献をなしたと言うべきではあるまいか。

（N）

#### ◆陳国燾「魏晉至隋唐河西胡人的聚居与火祆教」

（『西北民族研究』1988年第1期、198～209, 282）

中国において、所謂胡人（北方の遊牧勢力ではなく、イラン系のオアシス住民、主としてソグド人を指す）と呼ばれるものの活動は、早くも後漢時代より知られているが、本論文は特に魏晉より隋唐時代にかけて、河西地域に定住した胡人の聚居や活動の情況、および彼らの信仰する火祆教の性格について詳細に論究したものである。

河西地域において胡人という場合、それは単に中央アジアより来住したソグド人だけを指すのではなく、河西地域に土着する月氏民族のことも含んでおり、彼らは、後漢・三国時代にはいまだ武威・張掖を中心として聚居していたとされる。ただしこのことは、後漢以来河西地域にソグド人が流入・定着したことを否定するものではない。なかでも涼州はその中心であり、彼らは使節や侍子・商人・僧侶・技芸人・奴婢などとして、魏晉時代より北朝時代にかけて盛んに流入している。五世紀後半には、粟特王国の分裂によって、昭武九姓の商胡が多く中国に来住し、トウルフアンより武威（涼州）一帯にかけて定住したと指摘される。

隋唐時代にも、なお涼州は彼らの活動が盛んであり、とりわけ安氏・康氏などは、刺史を始めとする地方官吏に任命され、有力な胡族勢力を形成していた。このことは、『隴右金石録』巻三に収められている「大唐上儀同故康莫寧息阿達墓志銘」などからも、積極的に傍証される。

また同時に、こうした彼らの東方進出とともに、その信仰する火祆教も河西および中国内地に伝播し、その居住聚落を中心に火祆祠も数多く存在した。やがて唐代以後、祆教の信仰も衰退するが、それはひとつには、仏教の教義が祆教に対して不断に影響を与え続け、浸透していったからであるとさ

れる。著者は火祆祠（胡天祠）と仏教との密接な関係について、深い関心を寄せておられるが、トゥルファンでも麹氏高昌国時代には、「高昌（年次未詳）高乾秀等按畝入供帳」（67TAM88:25 録文は、『文書』Ⅱ、184頁、参照）に、寺院である玄領寺が、所有する一（畝）半の田畝額に応じて、12月15日に穀物一石を供出し、それを阿某に付与して、胡天＝祆祠を祀っていたことが記録されている（「十二月十五日、一斛、付阿□□□、祀胡天」）。これによれば、寺院が胡天祭祀を国家から課せられていた可能性もあることとなり、彼らソグド人の政治的・経済的な影響力だけでなく、彼らの信仰する祆教の実態を丹念に探っていく必要を痛感する。

いままで知られているようでややもすれば等閑にされてきた、河西地域における定住ソグド人の活動について、本論文から学ぶべきことは多い。そして、密接な関係を有すると予想されるトゥルファン地域のソグド人の検討を含め、今後ソグド人の東方進出を総体的に把握していくことが課題として残されているのである。（T）

#### ◆陳国燧「從葬儀看道教“天神”親在高昌国的流行」

（『魏晉南北朝隋唐史資料』第9・10期、1988年、13～18、12）

『魏書』（『北史』）や『隋書』の高昌伝に見えている「俗事天神、兼信佛法」なる文言について、主として葬送習俗の面から検討したもので、「天神」とは表題にもある道教信仰の所産であるというのがその結論。

著者は、宗教信仰は葬送習俗上に反映されるという前提のもとに、先ず吐魯番から出土した随葬衣物疏の付加文言を取り上げる。高昌郡時代の衣物疏には、青龍以下の四神や「急急如律令」といった道教的な常套句があり、後者は道教の符令にある文言であって、天神に対する崇拜觀念の表象という。また近年出土した「桃人木牌」にも同じような文言が見えているが、この木牌は中国で古くから行なわれていた桃木によって鬼を避ける風習のまさに実例であって、鬼を避けるために墓頂に立てられたものと推測できる。さらに阿斯塔那一号墓から出土した紙鞋に見える「騰」字も「上昇」の意味があるので、死者の昇天を祈念したものと思われる。要するに天神を信奉する思想の表われと言えよう。次の高昌国時代になると、随葬衣物疏の付加文言には、「比丘果願」・「佛弟子」以下の仏教に由来する語句も登場するが、その一方で張堅固、李定度といった神仙や「五道大神」など道教の經典類に見える存在も確認され、まさに道仏混合の所産であって、これこそ「俗事天神、兼信佛法」の内実そのものである。そればかりか、高昌国時代の墓では、墓室の中央部に「伏羲女媧図」が掛けられていたり、また一点だけだが、道教の「符咒」も出土している（59TAM303:1/1 録文は、『文書』Ⅱ、33頁、参照。ただし、著者は一部あらためているので、要対照）。前者は天庭を象徴しており、そこには死者が昇天して天神の臣民となれるようにという願望が潜んでいる。また後者は阿斯塔那三〇三号墓の前洞内で発見されたもので、護身作用を有していたと考えられる。

著者は高昌郡と高昌国時代を通じて、出土文物を博搜して道教の痕跡を残らず摘出することにより、高昌伝の問題の文言の内容を確定しようとしたかに思われる。従来この文言中の「天神」は、ゾロアスター教か、あるいは自然崇拜か、ということで論戦が繰り返されてきたところに（本誌、第12号、参照）、著者は第三の解釈をもってこれに参入してきたわけで、その意味は小さくない。それでは著者の解釈は支持されるべきであろうか。

著者が強調されるように、たしかに高昌郡時代から道教的な色彩を、この地での葬送習俗に認めることはできる。そしてそれは高昌国時代についてもあてはまる。しかしそのことが直ちに、道教が仏教とともに特記されるほどこの地で信仰されていたことまでも意味するわけではなからう。著者は高昌国時代の随葬衣物疏の付加文言こそ、高昌伝の文言の内実であると言う。しかしこの付加文言は、道教の要素を取り込むことによって中国化した仏教がこの地にも及んだことを意味するものであっても、それ以外ではない。そもそもかかる付加文言は、同時代の中国内地の衣物疏にも見られるも

のなのである（「北齊武平四（五七三）年七月高僞妻王江妃隨葬衣物疏」、参照）。つまりはこの地に特有のものではないのであって、その意味では著者の認識の前提であると同時に帰結でもあると思われる中国・高昌一体説は真理なのだが、であればなおさらのこと、高昌伝の文言はかかる状況を説明するものではなかったのではあるまいか。あえて高昌国に関して「俗事天神、兼信佛法」と記さなければならなかったのは、中国内地とは異質な宗教、信仰の形態がそこにあったからと考えるべきであろう。また「天神」なる語は、高昌伝とともに西域伝にも見られる（『魏書』卷一〇二西域伝焉耆國条、波斯國条）。両伝の近縁関係を思えば、これらが全く異なる意味内容を有していたとは考えにくい。この点も著者の見解に対する批判となろう。

著者は本稿では、前稿から一転してゾロアスター教の東方における普及に対して否定的な立場をとっている。著者も認めているように、吐魯番におけるソグド人の存在もゾロアスター教の普及も否定できないのである。したがってその真意は正直なところ理解に苦しむのだが、あえて推量すれば、吐魯番といえども、漢人社会においては道教や仏教の圧倒的な優位は動かしがたく、高昌伝はその事実を記したものであるところが著者の立場なのではあるまいか。しかし高昌伝が漢人社会のみを記述の対象としたという証拠はなく、また吐魯番にはソグド人をはじめとする各種の少数民族が来居していたことは、上に紹介したように郭氏や杜・鄭両氏の論稿などが強く主張するところである。（N）

■ 紹介 国家文物局古文獻研究室編『出土文獻研究續集』（文物出版社 1989年12月）  
1985年に出版された『出土文獻研究』に次ぐ、古文獻研究室の編集になる二冊目の論文集であり、前集同様、甲骨文や金文、簡牘・帛書類を取り上げた論稿とともに、敦煌・吐魯番文書に関する論稿が収録されている。

新出吐魯番文書に関連するものとしては、①王素「麹氏高昌曆法初探」、②姜伯勤「敦煌新疆文書所記の唐代“行客”」があるほか、③王永興「武則天長安二年（702年）西州括田括戸中官府勸田文書考釈－読吐魯番文書札記－」が『吐魯番考古記』所収文書や大谷文書を取り上げ、また④鄧文寛「北魏末年修改地、賦、戸令内容的復原与研究－以西魏大統十三年計帳為線索－」、⑤劉燕文「從敦煌写本《字宝》的注音看晚唐五代西北方音」は表題にあるごとく、敦煌文書に関わる精緻な研究であり、⑥趙超「論漢唐間的異体字及《千祿字書》」も、金石文とともに、敦煌・吐魯番出土文物を史料としている。

このうち、①は高昌国時代の紀年表記例を網羅的に精査しており、また②は「行客」なる語が多様な意味内容を有していたことを主張していて、ともに今後議論を呼ぶことになろう。（N）

#### 【お詫びと訂正】

本誌第二五号、文書閲覧Ⅱに掲載した大谷文書中、文書番号に誤記がありましたので、以下のように訂正させていただきますと思います。

三頁：（誤）★大谷4889号文書 ⇨ （正）★大谷4885文書

したがって同頁の大谷4911文書の解説文中にある「大谷4889号文書」も「大谷4885号文書」にあらためることになります。これは編者の全く不注意なミスで、研究会宛に誤りをご指摘下さった龍谷大学文学部の小田義久先生に厚く御礼申し上げると同時に、所蔵先の龍谷大学、同図書館の関係各位、ならびに読者の方々に深くお詫び申し上げます次第です。（關尾）

事務局（連絡先） 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川 正 晴 方

TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)